

- 1 事業名 令和2年度 教育事業 全国高校生体験活動顕彰制度
「地域探究プログラム」
- 2 趣 旨 高校生が地域づくりや地域の課題解決などに関する体験活動を通して、問題発見・解決能力を身に付け、新たな価値を創造する人材を育成するとともに、それぞれの実践活動の成果や自身の成長を適切に評価し、青少年の体験活動に関する社会的な認知を高める。
- 3 期 日 令和2年5月11日（月）～令和3年2月1日（月）
国立岩手山青少年交流の家を利用した日
令和2年12月23日（水）、令和3年2月13日（火）、14日（水）
- 4 参加者 岩手県立雫石高等学校 21名
- 5 後 援 雫石町教育委員会
- 6 協 力 いわてNPO-NETサポート
雫石町政策推進課
NPO 法人まちサポ雫石
- 7 内 容

(1) 日 程

月	日	カリキュラム名	単位時間	科目の内容
5	11(月)	オリエンテーション		
6	1(月)	講義・演習②—1 「課題解決の基礎」	3	フィールドワークの仮説、行動計画策定
	15(月)			
	22(月)			
7	13(月)	講義・演習②—2 「課題解決の基礎」	1	フィールドワークの行動計画策定
	夏休み	ガイダンス	1	制度の概要説明、スケジュール確認
		講義・演習②—3 「課題解決の基礎」	1	フィールドワークの仮説、行動計画策定
		講話等「地域づくりの実践」①	1	興味・関心事を引き出し、意欲を高める
		アイスブレイク	1	
フィールドワーク① 「地域の魅力を発見」	3	ヒアリング調査や体験で仮説検証		
8	24(月)	講義・演習① 「地域理解」	2	情報共有・仮説修正
	31(月)	講義・演習④—1 「行動計画の基礎」	1	実践活動の行動計画立案
		発表①	1	実践活動案のブラッシュアップ
9	4(金)	フィールドワーク② 「地域課題の探究」	2	ヒアリング調査や体験で仮説検証
	7(月)	実践活動のためのガイダンス	1	実践活動を実施する上での安全管理や社会のルール・マナー
	14(月)	実践活動	3日	実践活動に向けた話合い
	28(月)			実践活動に向けた話合い
10	4(日)			実践活動（軽トラ市参加）
	5(月)	講義・演習③—1 「地域課題の探究」	1	要点をまとめる。文化祭掲出に向けた準備
	12(月)	講義・演習③—2 「地域課題の探究」	1	課題解決のための実践活動案

	24(土)	発表②	1	文化祭で成果報告
11	16(月)	講義・演習③-3 「地域課題の探究」	1	地域の理解を深める
	30(月)			
12	7(月)	講義・演習④-2 「行動計画の基礎」	1	実践活動の行動計画立案
	14(月)	講義・演習④-3 「行動計画の基礎」	1	実践活動の行動計画立案
	23(水)	地方ステージ		
	冬休み	実践活動	2日	実践活動(各グループ)
1	18(月)	講義・演習①-2 「地域理解」	1	情報共有, 仮説修正
2	1(月)	発表②	1	最終報告会
	14(日)	全国ステージ		
	22(月)	まとめ	1	1年間の振り返り, 春休みの活動案

(2) 講師

・菊池 広人 氏 (いわて NPO-NET サポート事務局長)

(3) 企画のポイント

「生徒一人ひとりが、自分の興味関心について探究し続けることで、自分の強みを伸ばしながら存在価値を高め、未知なる社会に一人ひとりが物語(ストーリー)をデザインしてほしい」そんな願いを込めて総合的な探究の時間の学習のテーマにした。

実施協力校の選定にあたっては、岩手県教育委員会から学校の魅力化に取り組もうとしている小規模校の学校をいくつか紹介いただいた。その中から、雫石高等学校に協力を依頼した。雫石高等学校に、町として高校生の活動を支援していこうと「虹色コンパス事業」を企画していた雫石町とも連携することになった。

ファシリテーターを「いわて NPO-NET サポート事務局長 菊池広人氏」に依頼し、雫石町役場政策推進課、雫石町役場若手職員、NPO 法人まちサポ雫石と本施設が連携して支援にあたった。

(4) 広報のポイント

オリエンテーション合宿や雫石高等学校の文化祭、東北地方ステージなどを地方紙や地方テレビ局にニュースリリースを行った。

(5) 運営のポイント

今年度は、コロナウィルス感染症や豪雨警報発令により、計画通りに実施できない面もあったが、できる限りの対策を考え、高校と支援者同士で連絡を取り合い実施した。

雫石高等学校の「総合的な探究の時間」年間計画に、毎週月曜日の6時間目を当てて実施した。ファシリテーターは菊池広人氏が行い、学年教諭と雫石町職員、NPO まちサポ雫石職員、テンパーク職員で支援を行った。

雫石町は、学びの経過を広報誌に掲載したり、必要な物的支援を行ったりした。まちサポ雫石は動画制作をして YouTube で発信したり、雫石町軽トラ市の出店支援を行ったりした。

岩手山職員は、連携団体の連絡調整及び、講師謝礼、東北地方ステージ出場の支援を行った。それぞれの支援者が、効果的に生徒の学びを支えることができた。

8 成果とその普及

○地域の様々な人と協働して取り組めたこと

- ・ 役場の若手職員がメンターとして実践活動のサポートを行った。生徒だけの議論では話し合いが平行線で結論が出ないことでも、アドバイスや進捗管理を行い効果的な支援に繋がった。

○高校生の学びの様子を地域に発信することで、高校の魅力を周知するとともに地域の協力が得られる体制作りができたこと

- ・ ニュースリリースやプレスリリースを積極的に行い、体験活動を積極的に行う高校生を社会がしっかりと評価することの機運を高めることに資するようとした。

○事業終了後の振り返りでは、「難しかった」「自分の興味・関心とアクションをつなぐのに苦労した」などの感想があったが、「今まで当たり前だと思っていたことが不思議に思え、それについて掘り下げることができた。」「他の地域の人たちの発表を聞いて、自分も地域のイベントなどに参加してみたいと思うようになった。」「自分の強みに気付くきっかけとなったし、活動内容が自分のやりたいことなのかを判断することができた。」など、地域の新たな価値について見つめ直し、自分自身の成長や問題発見・解決能力、想像力の向上につながったという感想が聞かれた。

9 今後の課題

○フィールドワーク先と青少年教育施設での合宿の調整

- ・ 学校周辺地域でのフィールドワークを計画したため、移動手段や活動時間の関係で国立岩手山青少年交流の家での合宿中の実施が困難となった。今後、オリエンテーション合宿のカリキュラム内容を工夫し、生徒の目的や計画に沿った形で実践していく必要がある。

○青少年教育施設での合宿の必要性が高校側に伝わりにくいこと

- ・ 総合的な探究の時間を年間の時間割に設定している学校が多いため、青少年教育施設での合宿において授業時数のまとめ取りをすることについて高校側は難色を示すことがあった。そのため、青少年教育施設での合宿のあり方について学校と調整しながら検討していく必要がある。

○関係者とのスムーズな連絡・連携

- ・ 講師と町、講師と学校等、講義に内容と関わりのある者のみで連絡をとり合い、情報が関係者全員で周知できないことがあった。関係者全員が情報を共有できるよう青少年教育施設職員が対応する必要がある。

○学校現場とのスケジュール感のズレがあること

- ・ 学校の総合的な探究の時間は、1年間かけてテーマを探究していく。地方ステージに向けて提出する報告書の〆切が11月末までにというスケジュールは、探究途中の報告になってしまう。地方ステージ、さらには、全国ステージに向けて探究は進行していく。それらを考慮したスケジュール感になっていないため、今年度の対象校から次年度の協力が得られないことになった。



OR合宿でのアイスブレイク



軽トラ市での実践活動



地方ステージでの発表